飼育レポート

ルイの屋外展示場デビュー

獣医師　小川 裕子

ルイは11歳のメスのチンパンジーです。横浜市立野毛山動物園生まれで2017年の冬に大森山へ来ました。翌年の春、屋外展示場に慣らす訓練の際に１頭で外に出したところ、初めての展示場で不安になりパニックになって以降、屋外展示場へ出てくれなくなりました。

2021年の春、「今年こそはルイに屋外展示場を好きになってもらい日光を浴びてもらう」と目標を立てました。ルイは16歳のコタロウと仲が良く同居できるので、コタロウが先に屋外展示場に出て、ルイを誘い出してもらう作戦を日本動物園水族館協会（JAZA）チンパンジー専門技術員の方など、他園の方々に相談し決定しました。

訓練に入る前は、屋外展示場の全体像をルイに把握してもらうため、展示場の様子をビデオ撮影して見せるなど工夫しました。そして６月中旬、緊張の１回目の訓練（10分間）を実施しましたが、ルイは寝室から外へ続く通路から動かず、外には出ませんでした。しかし、屋外展示場にいたコタロウが何度も優しくルイに近づき挨拶し、リンゴを運んで来て、「外にリンゴがあるから行こうよ」と誘う様子が観察でき、感動の10分間でした。

少しずつ訓練の時間を延ばし、７月下旬には数秒ですが全身を外に出すことが出来るようになりました。９月上旬には、より行動範囲が大きくなり10月下旬に訓練終了としました。

現在は、屋外展示場にあるフィーダー（餌が入っている道具）まで出てきて、枝を上手に使ってエサを取れるようになりました。しかし、まだ精神的余裕がないため、すぐに寝室に続く通路に戻れるようにドアは開けたままにし、ルイは気の向いた時しか屋外展示場にいませんが、個人的にはそれで十分だと思っています。

何年かかったとしても、ルイが心のままに、のびのびと屋外展示場で過ごし、櫓の上に登って近くの展示場にいるキリンを眺める日がくると信じています。

ルイ（左）とコタロウ

カナダヤマアラシのお見合い

飼育展示担当　國井　博

カナダヤマアラシの繁殖は、各園が個別に飼育していても限界があるため、浜松市動物園と名古屋市東山動植物園、当園の3園で個体を交換し繁殖を目指しています。2021年11月1日には、浜松市動物園からメスのメープルがオスのモズクとの繁殖のために大森山に来てくれました。カナダヤマアラシは、国内の動物園でも数頭しか飼育されていないので繁殖に期待がかけられます。

メープル（10歳）とモズク（12歳）はお互い高齢ですが、環境の変化を乗り越えて秋田の気候にもなじみながら、ゆっくりと相性の良いペアになってくれるように願うばかりです。私も精一杯愛情を込めて飼育し、良い報告を全国の皆さんに伝えられるように頑張りたいと思います。

モズクとメープル（右）、初めての同居訓練

チリーフラミンゴの新ペア誕生!

飼育展示担当　堀籠 麻子

2021年の春、チリーフラミンゴのペアが誕生しました。オス4歳とメス推定36歳のペアで、人(鳥?)生経験豊富なメスにリードされ、オスは後ろをついていっているような感じです。そんな2羽も夏頃に初めての産卵、抱卵を経験。ただ、当園のフラミンゴの営巣地は奪い合い必至です。このペアは負けてしまい、卵を置き去りにして巣から追い出されてしまう苦い経験を味わいました。次の繁殖シーズンには育雛まで自分達で達成できるよう見守りたいです。

補足ですが、このペアの血統は当園では貴重なため、ヨーロッパフラミンゴのペアに托卵し無事に赤ちゃんが生まれました(2ページ参照)。現在もすくすく成長しています。ここでは語り尽くせないほど個性溢れるフラミンゴたちを、ぜひ見に来てください。

奪い合い必至の営巣地

トレーニング技術を共有し続けるために

飼育展示担当　柴田 典弘

ハズバンダリートレーニング(動物の健康管理を目的とした訓練)の必要性が認知され、全国で多くの動物に対し実践されるようになっておよそ10年。今では飼育管理の一項目として定着し、技術の高まりも感じられるようになってきました。当園でも早期から積極的に取り入れ、これまでゾウ、キリン、アシカ、ユキヒョウで採血(検査)を行うなど一定の成果を挙げてきましたが、中心となって取り組んできた飼育員は変わっていません。今後、この飼育員が担当を外れた場合、今までできたことができなくなります。一度高めた健康管理技術を低下させることは動物福祉面において著しいマイナス要因となることから、当園では技術の共有を進めやすくするため、上記の動物種においては複数担当者制を導入するなど、健康管理やトレーニングにおいては恵まれた体制となっています。

さて、そのトレーニングを行うために欠かせないのは高いトレーニング技術を持った職員、つまり「トレーナースキル」を持った飼育員の存在です。トレーナーであれば新たに他園から導入された個体や園内で生まれた個体でも、これまでと同等のレベルまで引き上げることができます。つまり、高いトレーニング技術を持ったトレーナーが存在し続けていれば取り組みが途絶えることはありません。しかし、トレーナーの育成は簡単ではありません。すでにトレーニングを実施している個体から全てを学ぶことはできないため、理想は新規導入個体や繁殖個体からのスタートですが、その機会が少ない動物園で「トレーナーの育成」をすることは非常に難しいことです。また、日々のトレーニングは根拠や理論を基に実施していますが、想定外の行動への対処のほか、その動物や個体に合わせて臨機応変に手法を変更するなどの柔軟性が求められます。その柔軟性は担当動物を飼育してきた経験値に大きく左右されるため、トレーニングについて学ぶと同時に対象動物の能力や特性を見極める力が必要不可欠です。

当園では、ハズバンダリートレーニングを継続させるべき飼育管理手法と位置づけ、近い将来のためにトレーナーの育成を強化することにしました。飼育技術と動物の特性を理解するための経験を積み重ねながらも、新たなトレーナーの育成へと大きく踏み出します。令和4年は「できる人が一人いれば何とかなる」から「できる人は何人もいる」への挑戦の年。早速3月の通常開園後、キリンのケイタ(オス1歳)で開始されます。ケイタと共にゼロから新人トレーナーが成長していく姿をどうか温かく見守って下さい。

キリンのトレーニング